隋唐洛陽城の官人居住地

妹尾達彦

はじめに
1　洛陽史の自然・人文環境
2　隋唐洛陽城の都市プラン
3　官人居住地の変遷
おわりに

はじめに

隋唐洛陽史の研究は、古くからの豊富な研究蓄積を有している隋唐長安史と比べると、残された文献史料が質量ともに不備なこともあり、充分進展しているとは言えない状況が、長い間続いていた。しかし、近年における、考古学調査の一層の進展と、洛陽周辺出土の大量の墓誌の公刊は、洛陽史の研究環境を一新させており、重要成果が相継い

で誕生している。

近年の中国と日本における唐代洛陽史研究の動向を簡潔に整理した程存潔氏は、考古学調査と新公刊墓誌による成果を核に研究動向を次の九つに分類している。[1] (1)考古調査の成果に基づく徐松『唐両京城坊考』東都部分の改訂、(2)宮廷建築の考古調査と研究、(3)含嘉倉の考古調査と粮食供給問題、(4)洛陽城の磚瓦窯の考古発見、(5)則天武后の明堂、(6)里坊、(7)東都洛陽城の建築形態と長安との比較、(8)洛陽城の郊区・政区、(9)都市経済、である。程存潔氏の分類からも判るように、隋唐洛陽史を全体的に把握し得る条件が整ってきつつあると言えよう。

隋唐洛陽史に関する洛陽の研究機関としては、中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（一九五一年設立）、洛陽市文物工作隊（一九八一年建立。第一隊と第二隊に分かれる）、洛陽博物館（一九五八年建立）、洛陽古代芸術博物館（一九八一年建立）、洛陽歴史文物考古研究所（一九八六年建立）、洛陽都城博物館（一九八九年設立）等が存在し、これらの研究機関に属する計百名を越す洛陽在住の研究者が、考古調査や文献研究に従事している。

その研究成果は、『文物』や『考古』『考古学報』といった伝統的な学術誌に公表される外、近年は、『中原文物』（河南省博物館主弁。『河南文博通訊』として一九七七年創刊。一九八一年に『中原文物』に改称）や『考古與文物』（陝西省考古研究所主弁。一九八〇年創刊。一九九六年以後は陝西省考古研究所と洛陽市文物工作隊の共弁に変更）、『河洛春秋』（洛陽市歴史文物考古研究所・洛陽市歴史学会共弁、一九八三年創刊）、『河洛史志』（洛陽市地方史志編纂委員会主弁。一九八六年創刊）、『河洛文化論叢』（洛陽市歴史学会・洛陽市海外聯誼会編。河南大学出版社刊行。一九九〇年創刊）、『中国古都研究』（中国古都学会編。一九八五年創刊）等に逐次公刊されている。これらの報告や研究によって、洛陽居住者以外の者も、洛陽の考古調査の進行情況や、洛陽市在住の研究者による考古調査と歴史文献に基づく都市構造解明の過程が、如実に迫れる

ようになった。

本稿の目的は、このような近年の研究成果と研究動向を踏まえ、隋唐洛陽城の都市社会構造（都市の建築構造と社会集団の態様との相関）の変遷を、官人の居住動向を軸に明らかにすることである。官人居住地の変遷をもとに都市構造の変貌を論じる理由は、新たに大量に公刊された唐墓誌を系統的に活用するためであるが、同時に、都市の統治階層を構成する官人の居住動向が、当時の都市社会構造を決定づける要因になっていると考えられるからである。

先に筆者は、隋唐長安城の官人居住地の変遷を図化して、都市社会構造の変貌との関連を論じた。[2] 本稿は、同じ方法に基づいて、洛陽の官人居住地の変遷を図化し、長安城の事例と比較して、洛陽城の都市社会構造の特徴を明らかにしようとするものである。

洛陽は、唐末に廃墟と化して再び国都となることの無かった長安と違い、五代・北宋期にも、国都ないし陪都としてそのまま継承され、隋煬帝による六〇五年の建設から一一二七年の北宋壊滅までの約五〇〇年間に亘り、政治的に重要な都市であり続けた。[3] そのために、一つの都市の歴史の中に、隋から北宋に及ぶ中国史の転換期の記憶が、比較的明瞭に刻印されており、洛陽の都市社会の歴史の中に、時代の変化を集約的に窺うことが可能となっている。

そこで、本論では、分析の前提として、(1)洛陽の自然・人文環境の特徴を整理して、洛陽史を構成する空間的枠組の存在を指摘し、続けて、(2)最近の考古学調査の成果に基づいて、隋唐洛陽城の都市プランの特徴をまとめてみたい。以上の論を踏まえ、(3)隋・唐・五代・北宋期に洛陽に居住した官人の居住地の変化を図化し、唐長安城の事例と比較しながら、官人居住地の変化と、洛陽城の城郭建築・各種官庁・商店の立地の変遷との相関を探り、特に、安史の乱を境に変貌する洛陽の都市構造の特徴を明確にしてみたい。[4]

1　洛陽史の自然・人文環境

洛陽の立地が、中国大陸の地形・気候・農業・文化上の境域に存在することが、交通の要衝であることと相まって、洛陽の歴史構造を左右する大きな要因となった。その重複する境域性ゆえに、洛陽は、各地の多彩な産物の交易地となり情報の交叉し集積する中原の中核都市になったのである。

すなわち、洛陽は、地形的には、内陸砂漠の微粒子が風によって吹き寄せられてできた、華北西部の第一次黄土の山岳地帯と、その黄土が河川に流され沖積して造りあげた、華北東部の第二次黄土（次成黄土）の華北平原との境域に位置しており、華北は、洛陽を境に西部と東部に地域区分できる。[5] 農業区分上は、ロッシング・バック（J. L. Buck）による一九三〇年代の著名な調査報告によれば、華北西部の冬小麦粟地区と華北東部の冬小麦高粱区の境に位置し、中国全体で言えば、洛陽は、華南の湿潤農業地域を臨む華北の乾燥地農業地域の南端に存在していた。[6] 気候上は、寒温・乾燥帯と暖温帯との境域に位置する。[7]

洛陽の交通・軍事地理上の重要性は、洛陽が、黄河中流の渡し場・孟津を北方二〇キロメートルに控えた南北交通の要衝に位置することから明白である。洛陽西部の山岳地帯の黄河中流では、黄土を抉る深い渓谷のために南北の往来は古くから困難であり、一方、洛陽東部の黄河下流域は、頻繁に生じる洪水のために交通がしばしば遮断された。渓谷が切れて、黄河下流に広がる扇状地の扇頂部分に相当する洛陽北部が、古代の黄河の絶好の渡し場となった。[8]

このように、洛陽は、南北交通の絶好の結節点である点に加え、黄河水系の水運と陸路によって黄土高原と華北平

野を媒介する東西の交通の要でもあった。[9] 洛陽が、華北平野の穀物の貯蔵庫・積み替え地として機能したことは、洛陽城内の含嘉倉の発掘によって実証された。四通八達の水陸の便に恵まれた洛陽が、華南と華北、山西と山東の文化が出会い交流する地となり、中国文化の故郷となったのも当然であろう。

また、洛陽周辺の地形を見ると、北側の岡によって黄河の氾濫を免れるとともに、黄河と北の岡が、北方からの侵入への防壁もなしている。四方を山と関に囲まれた洛陽は、洛水と伊水の造る河谷盆地（豫西盆地）の西北端にあって、自然の要害にも位置していた。[10] 関中平野の長安から見れば、洛陽は、華北東方を統治するための軍事拠点であり、華北平野と長江下流域を掌握する扇の要の位置にあった。[11]

一般に、前近代における国都の立地要因としては、支配者の根拠地と穀倉地帯との距離や、穀物・税の輸送技術、防御の便、文化的価値等が挙げられる。[12] この点で、洛陽は、境域に位置して人流・物流の要となる地理環境や、後背地に華北平野の穀倉地帯を擁して水陸の輸送に恵まれていること、自然の要害地であること、東周以来の洛陽奠都の王朝の記憶が重なり歴史的・文化的価値に満ちていたことなどから、国都としての条件を十分備えていた。[13] 洛陽が、「九朝の都」になるのもうなずける。[14]

それでは、なぜ、このように恵まれた環境にある洛陽が、北宋の滅亡以後に地方小都市となり、二度と政治の中心地になりえなかったのであろうか。[15] 洛陽の政治的地位の低下の理由は、中国史における国都の立地パターンが、中国空間の拡大とともに、宋代を境に変化したからである。このことは、中国史における両京制度が、中国史前期の東西両京制度（西京長安の軍事・政治と東京洛陽の経済・文化）から、中国史後期の南北両京制度（北京の軍事・政治と南京の経済・文化）に変化した点に端的に示されている。

中国の国都の変遷には、図1中国六大古都の変遷と洛陽のように、一定の規則性が認められる。つまり、唐末から北宋にかけて、(a)中国華北を望む非漢族の主要根拠地が西北から東北へ移動したこと（軍事要因）と、(b)穀倉地帯の華北から華南への移動（経済要因）とが、ほぼ同時に進行したために、国都の立地は、長安と洛陽を東西に結ぶ線から、北京と南京を南北に結ぶ線へと転換した。[16] 唐宋以前の中国の空間統治において、洛陽と長安は、華北の東西に対をなす相補的な関係にあり、長安の地位低下はそのまま洛陽の地位低下に直結した。

長安の立地と比較して洛陽の特徴を明確にするために、洛陽を中国の空間構成の上に置いてみると、図2中国の空間構成と洛陽のようになる。現在の中国の空間は、自然地理・民族分布・歴史上の区分に基づき、内中国Inner China（中国本土China Proper）と外中国Outer China（中国外部Outside of China Proper）に大別され、[17] 内中国は、さらに、主に水系と集水域に基づき八地域に区分でき、[18] 外中国は、四地域に区分できる。この空間構成は、基本的に、唐宋にまで遡りうると考えられる。この図2のように、洛陽は、中原の名にふさわしく、内中国の中心に位置していた。

一方、中国の空間構成の中で長安（西安）を見ると、内中国の中心では無く、内中国と外中国の境域に立地している。これは、北京の立地と基本的に一致する。中国の長い歴史の中で、長安と北京が、最も長期にわたって国都であり続けた根本的な理由は、両都市が、内中国と外中国の境域に位置するために、国内統治と国際関係の政治機能を合わせ持つことができたからである。特に、外中国からの圧力のもとで外中国と内中国が結合した時の王朝の都として、中国史前期においては長安が最適であり、後期には北京が最適であった。

開封に都した北宋は、穀倉地帯が東南に移動する時期に相当すると同時に、西北（タングート族）と東北（契丹族）

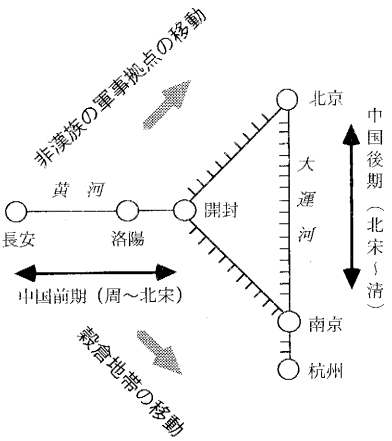


図１　中国六大古都の立地と洛陽

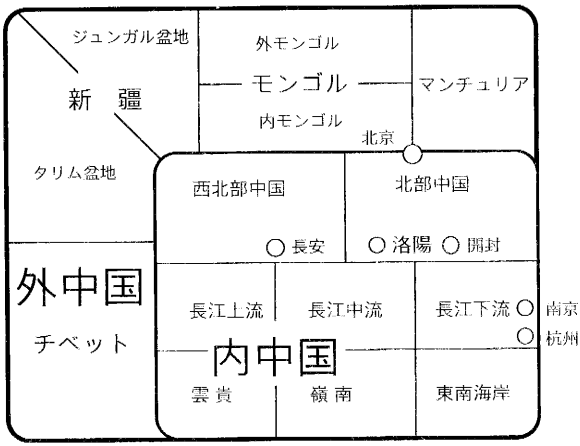


図２　中国の空間構成と洛陽

本図は、妹尾達彦「都市の生活と文化」（谷川道雄主編『魏晋南北朝隋唐史の基本問題』汲古書院、1996年）所収の図７「中国の空間構成Ｂ」に基づき、新たに中国六大古都の立地を記入して、中国の空間構成の中での洛陽の立地を示したものである。この概念図のように、洛陽は内中国の中核に位置するが、内中国と外中国を包含する統治空間の中では、東南に偏っている。

の両方面の非漢族の軍事勢力に圧迫される時代だった。開封の特異な立地は、長安から北京へ中国の国都が変化する過渡期の都であることを示している。開封が北宋の国都になったために、その西方の洛陽は、北宋期にも西京として一定の政治的役割を残存させた。

要するに、洛陽は、内中国の中の境域に位置しているために、中原を基礎とする王朝の都にはふさわしいが、外中国と内中国の境域には位置していないので、両空間を包み込む王朝の都としては、長安や北京の適性に劣る。洛陽に奠都、ないし実質的に都した主な歴代王朝、すなわち、東周・後漢・曹魏・西晋・北魏・隋（煬帝期）・武周（神都）・後梁・後唐等は、等しく、外中国西北部よりも、外中国東北部と内中国の華北平野の掌握に統治の重点を置いた王朝と考えられる。

この点で、煬帝の洛陽城建築と洛陽を起点とする南北大運河の開鑿は、七世紀初頭の隋が、なによりも華北平野の統治に重点を移したことを端的に示している。[19] 武則天による洛陽の国都化も、武則天に対立する統治集団（関隴集団）の拠点である長安を避ける政治的意図に加え、武則天が、中国西北部よりも華北平野の統治の重要性の方を選択した点を考慮に入れなくてはならないだろう。[20]

2　隋唐洛陽城の都市プラン[21]

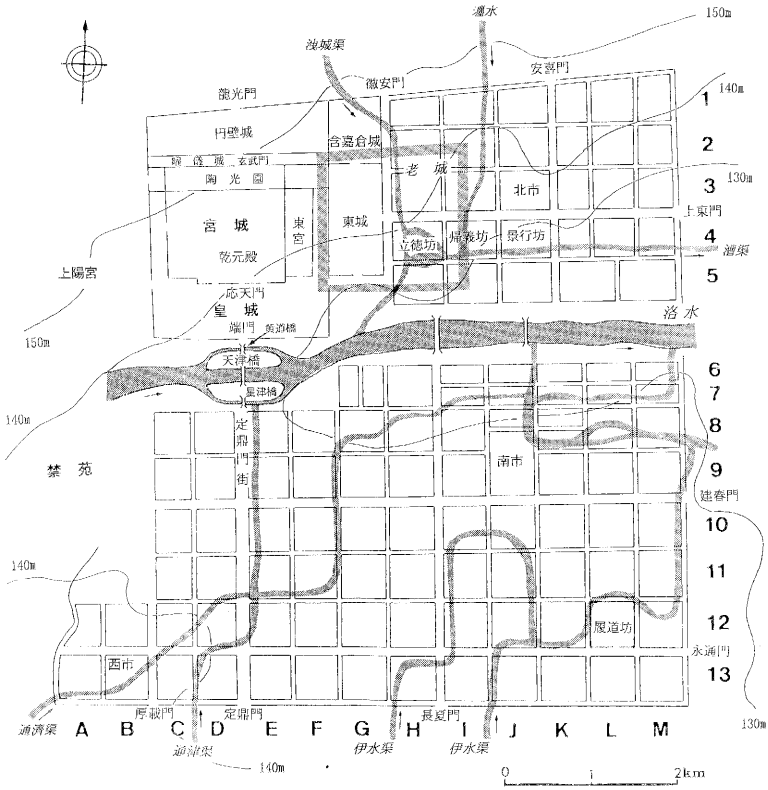
隋唐洛陽城の都市プランや建築構造の実態は、一九五〇年代に始まる考古学調査・発掘によって、初めて明瞭になってきた。幸い、張剣『洛陽歴史考古文献目録（一九〇〇―一九九〇）』（鄭州、中州古籍出版社、一九九二年）が刊行さ

れ、一九九〇年以前の考古学調査・報告の存在を網羅的に知ることができるようになった。そこで、ここに、洛陽城の考古調査の現状と都市プランをめぐる研究を整理して、残された問題点を探ってみよう。

今日までの主要な発掘報告をまとめたものが、表1隋唐洛陽城発掘報告一覧であり、それに基づいて描いた唐初の洛陽城の平面図が、図3唐初洛陽城復元図である。このように、四〇年を越す隋唐洛陽城の発掘調査の成果により、今や隋唐洛陽城の都市構造の全貌が窺えるようになってきた。細部に不明な点は残されているが、隋唐洛陽城の平面図を復元するための基礎データーは備わってきた。

洛陽城の全面的な調査は一九五四年に開始し、外郭城の範囲や、形態、一部の城門の跡がほぼ確定し（表1 11「洛陽漢魏隋唐城址勘査記」）、一九五九年春と一九六〇年秋には、中国科学院考古研究所洛陽発掘隊によって、一九五四年調査の再調査と、本格的な発掘調査が実施され、宮城と皇城、東宮、外郭城の構造等が新たに判明した（表1 15「隋唐東都城址的勘査和発掘」）。その後は、調査・発掘の重点を外郭城の街道、里坊、市場に移し、一九七八年には、今までの成果を総合して「唐洛陽城実測図」と「唐洛陽東都坊里復元示意図」が公表され（表1 16「『隋唐東都城址的勘査和発掘』続記」）、ここに初めて、正確な平面図に基づいて洛陽史を考察することが可能になったのである。

長安城の宮城・皇城部分は、現在の市街地とほぼ全面的に重なるために発掘が困難だが、洛陽城の宮城・皇城は西郊に存在したために、宮城・皇城の形態とそれに隣接する建築物の遺構が判明してきている。特に、隋末に破壊された宮城を全面的に改修・増築した武則天の神都時代の宮殿遺址が、克明に姿を現しつつある。同時に、松本保宣[22]、中村裕一[23]、清木場東[24]等氏により、徐松『唐両京城坊考』の東京宮城・皇城部分の記述の不備が指摘されている。今後、文献批判と考古学調査の成果が総合されて、隋から唐にかけての宮城・皇城の変化が明らかになることが予想される。



注1）本図の底図は、中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「『隋唐東都城址的勘査和発掘』続記」（『考古』1978年第6期）p.373　所蔵「唐洛陽東都坊里復元示意図」である。水渠の流路は不正確ではあるが、今は、除松『唐両京城坊考』巻5、巻首所載「東都外郭図」に依拠する。

注2）図中の東城と重なる位置の老城は、隋唐・北宋洛陽城の壊滅後、金の中京として建築され、現在まで居住地として継承されている（城壁は今は無い）。現在の市街地は、この老城以西の隋唐洛陽城の宮城・皇城にかけて広がっている。

図3　唐洛陽城の都市プラン

表 1　隋唐洛陽城発掘報告一覧（主要な報告・研究に限る）

[概論]
1　陰金星・黄明蘭『洛陽史文物志』第 11 節隋唐東都城遺址（洛陽市文化局、1985 年）　pp. 60～72
2　楊育彬『河南考古』第 7 章隋唐（中州古籍出版社、1985 年）　pp. 358～415
3　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（王岩・馮承択・楊煥新執筆）「洛陽隋唐東都城 1982－1986 年考古工作紀要」（『考古』1989 年第 3 期）　pp. 444～448
4　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（馮承択執筆）「1987 年隋唐東都城発掘簡報」（『考古』1989 年第 5 期）　pp. 234～250
5　葉万松「近 10 年洛陽市文物工作隊考古工作概述」（『文物』1992 年第 3 期）　pp. 40～45, p. 54
6　王岩「隋唐洛陽城近年考古新収穫」（『中国考古学論叢　中国社会科学院考古研究所建所 40 年祈念』科学出版社、1993 年）　pp. 438～444
7　河南省文物研究所『河南考古四十年』第 7 章隋唐五代（許天申執筆）（河南人民出版社、1994 年）pp. 357～366
8　葉万松・李徳方・季国恩「略論隋唐東都城遺址的考古収穫興文物保護」（『考古興文物』1996 年第 3 期）pp. 71～79
9　方孝兼「四十年来洛陽隋唐以降的考古発現興研究」（洛陽市文物工作隊『洛陽考古四十年－1992 年洛陽考古学術研討会論文集』科学出版社、1996 年）　pp. 40～50

[都市プラン]
10　郭宝鈞「洛陽古城勘察簡報」（『攷古通訊』創刊号、1995 年）　pp. 9～21
11　閻文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘査記」（『考古学報』1955 年第 9 期）　pp. 117～136
12　閻文儒「隋唐東都城的建築及其形制」（『北京大学学報（人文科学）』1956 年第 4 期）pp. 279～298（何冠彪編『隋唐史研究論集』香港：史学研究会、1979 年に再録）
13　洛陽博物館通訊組「洛陽発現唐城厚載門」（『考古』1960 年第 5 期）p. 6
14　中国科学院考古研究所資料室「中国科学院考古研究所一九六一年田野工作的主要収穫」（『考古』1962 年 5 期）　p. 274
15　中国科学院考古研究所洛陽発掘隊（陳久恒執筆）「隋唐東都城址的勘査和発掘」（『考古』1961 年第 3 期）
16　中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊（陳久恒執筆）「『隋唐東都城址的勘査和発掘』続記」（『考古』1978 年第 6 期）　pp. 361～379

[宮城]
17　洛陽市文物工作隊（朱亮執筆）「隋唐東都応天門遺址発掘簡報」（『中原文物』1988 年第 3 期）pp. 22～24
18　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（王岩・楊煥新・馮承択）「唐東都武則天明堂遺址発掘簡報」（『考古』1988 年第 3 期）　pp. 227～230
19　洛陽博物館（王愷執筆）「洛陽隋唐宮城内的烧瓦窯」（『考古』1974 年 4 期）　pp. 257～262
20　蘇健『洛陽隋唐宮城遺址中出土的銀錠和銀餅」（『文物』1981 年 4 期）　pp. 58～60
21　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城工作隊（王岩・馮承択執筆）「唐洛陽宮城出土哀帝玉冊」（『考古』1990 年 12 期）pp. 1087～1089

[夾城・東城]
22　洛陽市文物工作隊（余扶危・葉万松・李徳方・宋雲涛執筆）「1981 年河南洛陽隋唐東都夾城発掘簡報」（『中原文物』1983 年 2 期）　pp. 48～58
23　洛陽博物館「洛陽発現隋唐城夾城墻」（曾意丹執筆）（『考古』1983 年第 11 期）　pp. 1000～1003
24　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（包強執筆）「隋唐洛陽城東城内唐代磚瓦窯址発掘簡報」（『考古』1992 年第 12 期）　pp. 1098～1102, p. 1141

[含嘉倉]
25　河南省博物館・洛陽市博物館「洛陽隋唐含嘉倉的発掘」（『文物』1972 年 3 期）　pp. 49～58
26　洛陽博物館（賀官保・朱亮執筆）「隋唐洛陽含嘉倉城徳猷門遺址的発掘」（『中原文物』1981 年 2 期）pp. 10～13
27　余扶危・賀官保『隋唐東都含嘉倉』（文物出版社、1982 年）
28　洛陽市文物工作隊（趙青春・謝虎君発掘・執筆）「洛陽含嘉倉 1988 年発掘簡報」（『文物』1992 年 3 期）pp. 9～14, p. 8

[皇城]
29　洛陽博物館（葉万松・余扶危執筆）「洛陽隋唐東都皇城内的倉窖遺址」（『考古』1981 年第 4 期）pp. 309～314

[白居易邸宅址]
29　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（王岩・李春林執筆）「洛陽唐東都履道坊白居易故居発掘簡報」（『考古』1994 年 8 期）　pp. 692～701

[宋代]
30　洛陽市文物工作隊（葉万松・李徳方）「洛陽発現宋代門址」（『文物』1992 年第 3 期　pp.15～18、p.8
31　中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊（王岩・李春林執筆）「洛陽宋代衙署庭園遺址発掘簡報」（『考古』1996 年第 6 期）　pp.1～5

なお、隋唐洛陽城の都市プランの系譜については、後漢洛陽城以来の伝統を重視する見解[25]と、北魏平城以来の遊牧政権の国都建設の系譜を重視する見解[26]が出されている。最近、熊存瑞（Victor Cunrui Xion）氏は、隋煬帝の洛陽城建築を促した要因に、同じ鮮卑系政権の北周宣帝の洛陽宮建築の経緯に直接影響を受けた点と、大興城（長安）に奠都した父・文帝へのオイディプス・コンプレックスを新たに指摘している[27]。

上掲の考古調査・研究から、隋洛陽城が、宮城・皇城・曜儀城・円壁城・東城・含嘉倉城・外郭城・禁苑から構成されていることが確定した。ただ、長安と同じ設計者の宇文愷のプランに主拠したこともあり、宮城・皇城・外郭城・禁苑の四部分が建築構造の基幹部分をなす点で、長安と同様の構成原理を有している点も確認されている。

洛陽城が、長安城の建築構造と異なる点は、(1)城内の真ん中を東西に洛水が走り抜け、洛水に繋がる水渠が城内縦横に交差する点や、(2)西北部に宮殿・皇城が偏在する点、(3)宮城の防御的構造の優越（宮城を囲む皇城・夾城・陶光園・曜儀城・円壁城・東宮・東城の存在）、(4)全体の規模（面積）が長安城の半分強に過ぎない点、(5)方位のずれ（宮城の中軸を伊闕すなわち龍門の方角に合わせたため真の南北軸より少しずれる）、(6)市の数（長安が東西両市に対して南北西の三市）等である。

これらの相違は、洛陽が、長安よりも自然地形の制約を受ける度合いが大きく、長安と異なる政治・経済的目的のために建築されたことを示している。特に重要な相違である上記の(1)と(2)の原因は、次のように考えられる。

(1)都城の真中に大きな川を通した原因――この点は、やはり、城内を貫通する洛水によって、水運や財政経済上、軍事防御上の利便が計られたと考えるのが妥当であろう[28]。大運河の開鑿と洛陽の建築が同時期であることは、洛陽を華北の水運網の要に位置づけ、経済・軍事上の拠点にしようとしたことを示している。陸の都の長安に対して、水の

都の洛陽を併置することで、隋唐政権は、中国空間の柔軟かつ効率的な統治を目指したと考えられる。

また、象徴的解釈によれば、秦始皇帝の咸陽宮と渭水の関係を歴史上のモデルとして、宮城を北極星を囲む星座の投影とし、その南の洛水を天の川に象ることで、天の模倣としての聖都の存在を可視化しようとしたのだとする。[29] 洛水が町を南北に分断したために、洛水に架かる天津橋や中橋が、都市の生活と景観に不可欠となった。[30]

ただ、洛水と水渠のもたらす水運と美観に恵まれた見返りに、洛陽は、絶えず洪水に苦しめられることになる。特に、洛水北部の諸坊は、洛水の北流化の進展と治水工事が未熟なために、しばしば洪水に襲われた。[31] 洛水は隋唐五代を通して徐々に北流し、最も被害を被る洛水北岸の最南部の諸坊は、住民も稀だった（図3、図5～図11参照）。この諸坊は、北宋洛陽城では、完全に流れ去り、逆に洛水南岸の居住区が北に拡大している（図11、図13）。

(2)宮殿・皇城の西北偏在の原因――防御的にも洪水を逃れるためにも高台を選んで宮城・皇城を建築したことは確かである。現在の市街地も、隋唐の宮城・皇城址の上に広がっている。洛陽の大穀物倉である含嘉倉もこの高台の上に位置していた。

ただし、宮城・皇城を西北部の高台に偏らせる設計が、(a)計画当初のものか、それとも、(b)工事開始後に計画が変更した結果なのか、という点では見解が分かれる。つまり、後者(b)の考えでは、洛陽城は、もともと、大興城のような宮殿を南北軸とする左右対称の都市計画であったが、工事開始後に、宮城の西部が澗水と洛水の合流地の氾濫原に当たって居住困難なことが判明したので、西部への拡張を中止した結果、西北に宮城・皇城が偏在するに至ったとする。

この見解に対して上記の(a)の見解をとる宿白氏は、唐代の諸城址との比較の上で、洛陽城は、太原城・揚州城と同

じく、もともと西北部の高台の地形に宮城を建築する形式の都であり、西高東低の華北の地形に則ったものである点を述べ、宮殿を北部中央に置く対称的な都市プランは、国都の長安にのみ許されたと論じている。[32] 宮城のすぐ西方に存在する漢代以来の河南県城址（東周王城遺址と重なる）が、新たな城郭都市建築に際して障害となることを計画当初から判断できたであろうことも、宿白説を補強するようである。

象徴的解釈では、『易経』の後天図方位によると、宮城のある西北部は乾であり、乾は天の徳を意味するので、西北は宮殿の地にふさわしいと言う。[33] 隋唐洛陽城の宮殿位置が、風水にかなっているという見解もある。[34]

一方、上記の(b)計画変更説の重要な論拠として、邙山から洛陽城の宮城―定鼎門街を経て南の龍門・伊闕を望むと、これらが、ほぼ南北一直線上に連なる事実が挙げられる。この中軸線が、もともとは洛陽城を東西に等分する文字通りの中軸線として設計されていたはずであり、現存の隋唐洛陽城址のように定鼎門街が西にずれているはずは無い、と考えるのである。

洛陽城の建築を決めた煬帝が、邙山に登り、建築予定地の平原を見下ろして南方に龍門（伊闕）を遠望し、王者の都城の位置にふさわしいと述べた故事[35]は、煬帝が、もともと、この南北軸を都城の中軸にしようとしていたことを推定させる。この(b)の説は、閻文儒[36]、岡崎敬[37]、礪波護[38]、田中淡[39]、Nancy Shatzman Steinhardt[40]、李永強[41]等氏の研究で論じられている。

現在のところ、両説ともに論拠はあり、今後の考古調査と研究の進展を俟つ必要がありそうである。その意味でも、近年の宮城内の殿址発掘によって、唐代宮城の建築群と皇城を結ぶ中軸線の存在がより明確になってきたことは、重要である。[42]

すなわち、南から、宮城南門の応天門―乾元門―明堂―天堂―貞観殿―徽猷殿―陶光園南門―玄武門―円壁南門―龍光門と続く建築址が、宮城を南北に貫く中軸上に存在していることがほぼ判明し[43]、この中軸が、南方の端門―天津橋―定鼎門街―定鼎門―龍門（伊闕）へと続き、北方では、邙山を越える交通の要衝で現在の呂祖庵の場所に繋がることが分かった（**図4** 隋唐洛陽城の南北軸線）。

この唐代宮城の中軸線は、隋代宮城の則天門（唐応天門）―永泰門（唐乾元門）―乾陽殿（この北半分が唐明堂）―大業殿（唐貞観殿）に重なり、さらに、北宋時の宮城の宮殿も、唐代の軸線の宮殿址の基盤の上に、新たに建築されたことが判明している[44]。つまり、光宅元年（六八四）、武則天が、洛陽を神都とした際に、隋代宮城の中軸線上に、洛陽城内の建築群のクライマックスとして、新たに明堂（万象神宮）を建築したことが明らかになり[45]、武周期の最重要の行政・儀礼舞台の建築構造を知る手掛かりが得られるようになった[46]。

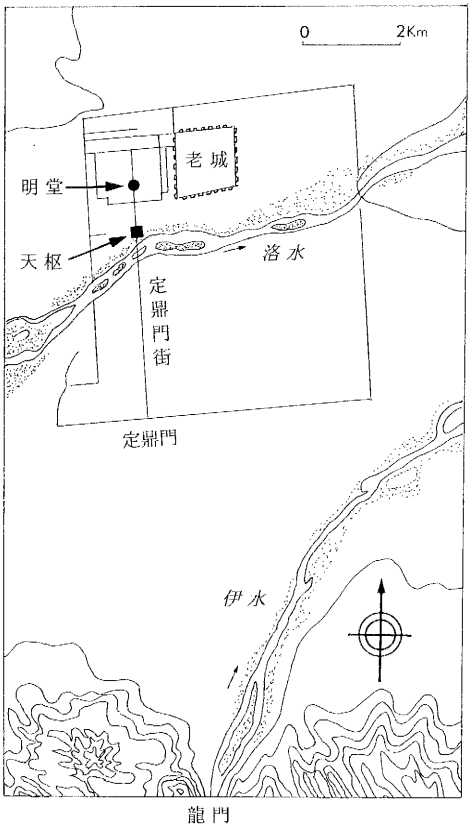


図4 隋唐洛陽城の南北軸線
（中華民国3年（1914）の地形図をもとに作図）

洛陽宮城内の南北軸は、仏教

を奉じた武則天の聖地・龍門と結ばれることで、武則天の洛陽改造計画の幹線となり、武周の国家儀礼の軸線として政権正統化の表舞台になった。女性の性ゆえに武則天が天子（父なる天の息子）となるには周囲の抵抗は強く、天子として伝統的に最重要の国家儀礼である昊天上帝を祀る円丘の祭祀を行うことも、武則天は積極的ではなかった。(47)

そのかわり、周知のように、武則天は、新編の『大雲経』を典拠に弥勒の下生と称し、女性にも王権の掌握を可能にする仏教の論理による正統化を試みる。明堂を核とする都城の中軸線が、天堂―明堂―龍門と繋がる仏教建築の中軸線に他ならないことを顕示することで、仏教論理による支配の正統性の可視化をはかったのである。武則天にとって、洛陽城南郊の龍門は、昊天上帝を祀る長安城南郊の円丘に匹敵する意味を持っていたのかもしれない。

3　官人居住地の変遷

隋唐から五代を経て北宋末に至るまで、東都・神都・西京として、重要都市で有り続けた洛陽は、各時代ごとの一定量の文献史料と考古学調査・発掘の成果が存在する。そのために、七世紀から一二世紀にかけて生じた中国史の構造的転換の具体像を、一つの都市を題材として検証する際に、洛陽は格好の事例になり得る。

洛陽史に関する専門の概説書としては、既に、史為楽「洛陽」（陳橋駅主編『中国六大古都』、中国青年出版社、一九八三年所収。後に、陳橋駅主編『中国七大古都』、中国青年出版社、一九九一年に、一部改定の上、再収録）、松浦友久・植木久行『長安、洛陽物語』（中国の都城2　集英社、一九八七年）、王洪文『洛陽』（幼獅文化事業公司、一九八八年）、蘇健『洛陽古都史』（博文出版社、一九八九年）、黎承賢・韓忠厚・晨喜元主編『洛陽』（中国歴史名城叢書、中国建築工業出版社、一九

九〇年）、許鎖孚・張宝剣主編『河洛定鼎地・洛陽巻（中国皇城・皇宮・皇陵系列叢書）』（中国人民大学出版社、一九九四年）等が存在する。ただ、以上の論著は、古代から現在に及ぶ洛陽の通史であり、隋唐洛陽史の専著ではない。

また、隋唐時代の洛陽城を概観する優れた論文として、宿白「隋唐長安城和洛陽城」（『考古』一九七八年第六期、中島比訳『龍谷史苑』一七、一九八〇年）、馬得志「唐代長安与洛陽」（『考古』一九八二年第六期、邦訳は西嶋定生編『奈良・平安の都と長安』小学館、一九八三年に所収）、徐苹芳「唐代両京的政治・経済和文化生活」（『考古』一九八二年第六期、邦訳は同上書所収）があるが、いずれも洛陽城に関する叙述は、長安城の後に付されており洛陽の専論ではない。

このように、隋唐時代の洛陽の都市構造の変遷の専論はまだ存在せず、考古学発掘の成果を新刊の史料と結合して、洛陽史の変遷を系統的に整理する作業は、今後に委ねられている。中国大陸を中心とする洛陽史研究の目録として現在最も完備している、前掲の張剣『洛陽歴史考古文献目録（一九〇〇―一九九〇）』（七四頁参照）をみても、研究はなお偏っており、論著の数自体も長安城に比べると依然として少ない。[48]

周知のように、唐代の長安・洛陽に関する資料整理は、平岡武夫等編『唐代研究のしおり第五　唐代の長安と洛陽索引』（京都大学人文科学研究所、一九五六年。同朋舎から一九七八年復刊）、同『同第六　資料』（同上）、同『同第七　地図』（同上）によって基礎が築かれた。ただし、長安関係の資料整理と研究の充実ぶりと比べると、洛陽の場合、基礎史料となる北宋・宋敏求『河南志』が後代に散佚したために、文献研究の進展は遅れざるを得なかった。

しかし、最近、清・徐松『唐両京城坊考』の日本語訳注として、最新の研究成果を取り入れた、愛宕元『唐両京城坊攷　長安と洛陽』（平凡社東洋文庫、一九九四年）が公刊され、また、高敏氏によって、清の徐松が『唐両京城坊考』執筆に際して『永楽大典』から集輯した『永楽大典本河南志』（現北京図書館蔵）の点校がなされ（徐松輯・高敏点校

『河南志』中国古代都城資料選刊、中華書局、一九九四年)[49]、研究環境の整備が進んできた。

とりわけ、ここ十数年間に、『千唐誌斎蔵誌』を始めとする墓誌計一万数千点が相次いで公刊され、この中に洛陽周辺出土の墓誌多数が含まれているために、史料面で、洛陽史研究に画期的な好条件がもたらされた。[50] この新公刊墓誌によって、清代に徐松『唐両京城坊考』が公刊されて以来の研究史上の画期を、今迎えていると言ってよいだろう。

新公刊の史料に主拠した唐両京ないし洛陽城の都市構造や住民に関する近年の研究は、高敏[51]、中島比[52]、陳久恒[53]、張忱石[54]、李健超[55]、趙超[56]、辛徳勇[57]、劉漢忠[58]、張剣[59]、閻文儒・閻萬鈞[60]、馮吾現[61]、程存潔[62]等氏によって進められている。[63] 以上の中でも、閻文儒・閻萬鈞『両京城坊考補』(河南人民出版社、一九九二年)、李健超『増訂唐両京城坊考』(三秦出版社、一九九六年二月)は、徐松『唐両京城坊考』を継ぐ代表的な成果と言えるであろう。近く、洛陽周辺で出土した唐墓誌を集成する洛陽市文物工作隊編『洛陽唐墓発掘報告』も公刊される予定といい、[64] 研究の一層の進展が見こまれている。

各種の学術誌に公表された個別の隋唐墓誌も加えて、以上の墓誌集や諸研究を総合すると、現在、居住した坊の名称の判明する隋唐洛陽城居住官人の数は、約一一〇〇名(隋四三名、唐一〇二二名)に達する(隋唐長安城の場合は約一三〇〇名)。この数自体は決して多いとは言えないが、徐松『唐両京城坊考』の東京の箇所に収録の官人数が、二七三名(隋三六名、唐二三七名)に過ぎなかったことを顧みれば、新公刊墓誌の有する価値は明らかである。

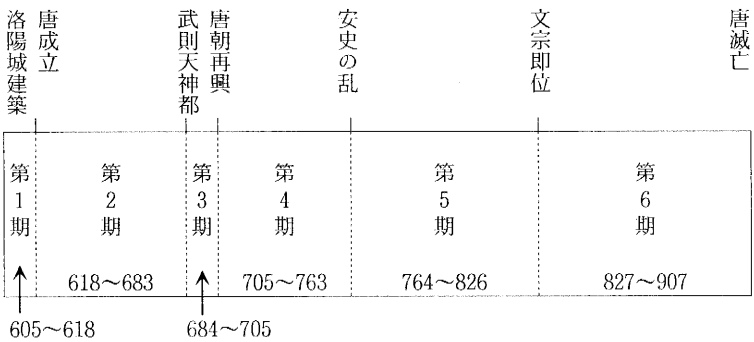
隋唐三〇〇年を通じて一一〇〇名程度の官人では、実際に居住した官人のごく一部に過ぎず、到底、統計的分析に耐えうる分量ではない。ただ、史料は、各時期に満遍なく分布しているので、他の文献史料と照合することで、洛陽における官人居住の変遷の傾向を窺うことができる。筆者は、両京に居住した官人を始めとする多様な階層の住民の

居住動向の図化作業を現在進めているので、その作業の一環として、隋唐長安城の事例と比較しながら、洛陽の官人居住地の変遷の特徴をここに論じ、それをもとに、洛陽の都市構造の変遷に一つの見通しを立ててみたい。

そこで、新公刊の墓誌史料等に基づいて、隋から唐五代を経て北宋に至る洛陽城の官人居住地を、政治上の時期区分をもとに、次のように七期に分けて図化し、この図を参考に、都市社会構造の変遷を論じてみよう。

第一期　隋（六〇五～六一八　洛陽城建築～隋末）図5
第二期　唐（六一八～六八三　唐朝建国～高宗治世末）図6
第三期　唐・周（六八四～七〇五　武則天の神都期）図7
第四期　唐（七〇五～七六三　中宗神龍元年～安史の乱終熄）図8
第五期　唐（七六四～八二六　安史の乱後～敬宗治世末）図9
第六期　唐（八二七～九〇七　文宗即位～唐末）図10
第七期　五代・北宋（九〇七～一一二七）図11

この図から全体の傾向を窺ってみると、第一期の隋代の傾向は資料が少なく不明瞭だが、第二期になると、明らかに北市（六五七年設置）と南市の周辺諸坊から官人が居住し始める点が認められる。[65] 第三期の武則天の神都期になると、北市と南市以外の諸坊にも官人居住地が広がる傾向が現れ、皇城南の定鼎門街の皇城寄りの諸坊（CDEF列）に皇族・高官の居住が目立つようになる。



記号の説明

- ● 官人（流内９品）
- ◎ 官人の夫人
- △ 親王
- ○ 公主・県主・女官
- ◗ 宦官
- ◑ 貢挙（科挙）受験生
- ●＝● 同居
- ●→● 邸宅所有者の変化
- －● 両時期居住
- ●－

凡例

① 徐松『唐両京城坊考』を始めとする従来の研究では、官人の夫人の墓誌銘を使用する際に、夫人の死亡時の居住地をすべて夫の居住地として記しているが、夫の死後、夫人が転居する例も少なくなく、機械的に夫人居住坊をすべて官人の夫人の居住地と見なすことはできない。本図では、官人の夫人の居住地のみ判明する場合は、官人の夫人の居住地として官人居住地とは区別して図化した。

② 本図の居住地は、洛陽に持ち家を有するか賃貸の居住者を意味しており、旅館に泊まる短期の上京者や寺観を間借りして居住する者は除外している。

③ 同一人物が異なる坊に居住している場合も、すべての居住地を図示する。

④ 同居の場合、同宗の場合は一名のみを図示する。

⑤ 邸宅所有者の変化の場合、同宗の場合は図示せず（例えば父から息子への相続）、異姓の場合のみ図示するが、同宗でも上記の時期が異なる場合は、両時期にそれぞれ図示する。

⑥ 隋洛陽城の都市プランは、辛徳勇『隋唐両京叢考』（三秦出版社、1993年）の図23「隋河南、洛陽両県界分図」を参照した。

⑦ 本図は、妹尾達彦「唐両京官人居住表」（公刊予定）に基づいて、流内官の変遷を図化したものである。

隋唐洛陽城官人居住地の変遷図　図5～図11

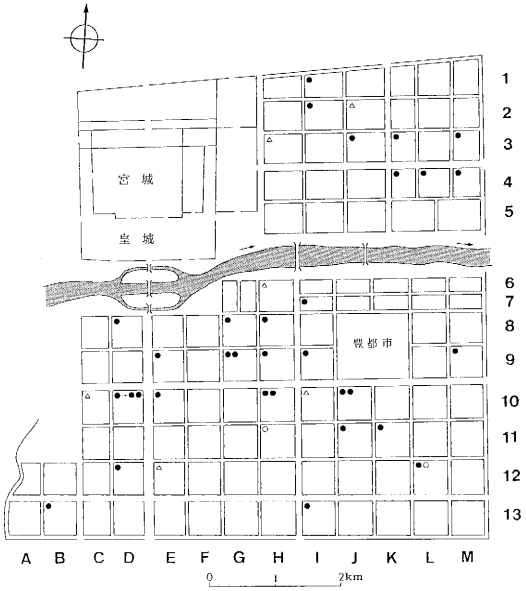


図5　第1期　隋（605～618：洛陽城建築～隋末）

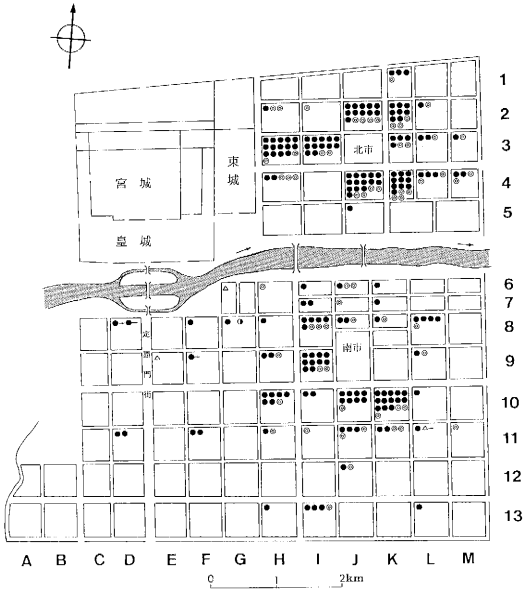


図6　第2期　唐（618～683：唐朝建国～高宗治世末）

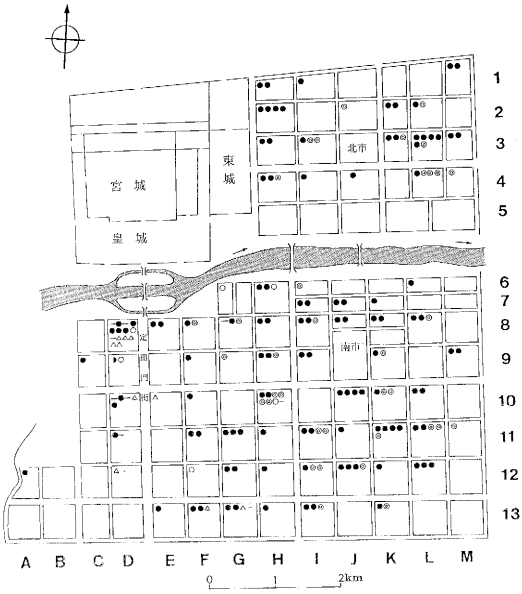


図７　第３期　唐・周（684～705：武則天の神都期）

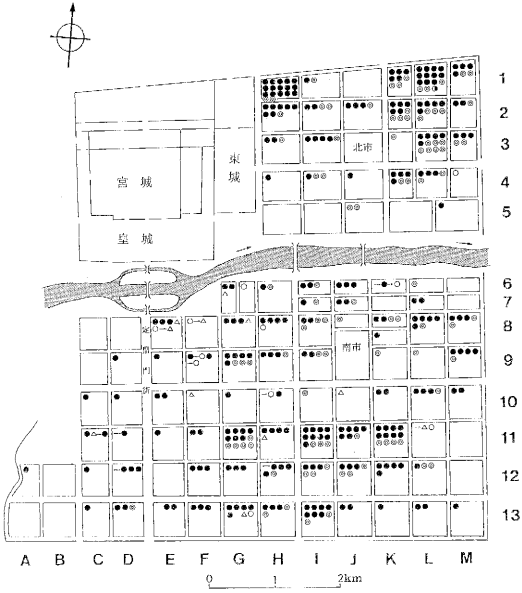


図８　第４期　唐（705～763：中宗神龍元年～安史の乱終熄）

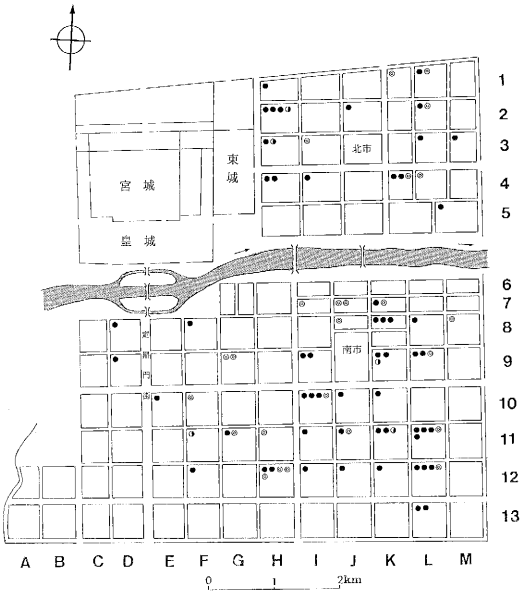


図9　第5期　唐（764～826：安史の乱後～敬宗治世末）

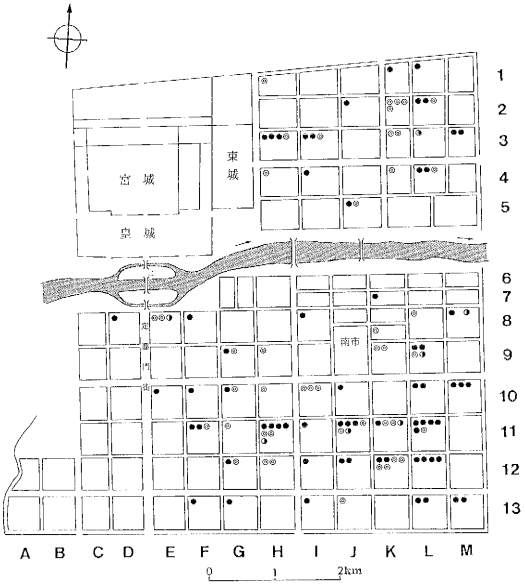
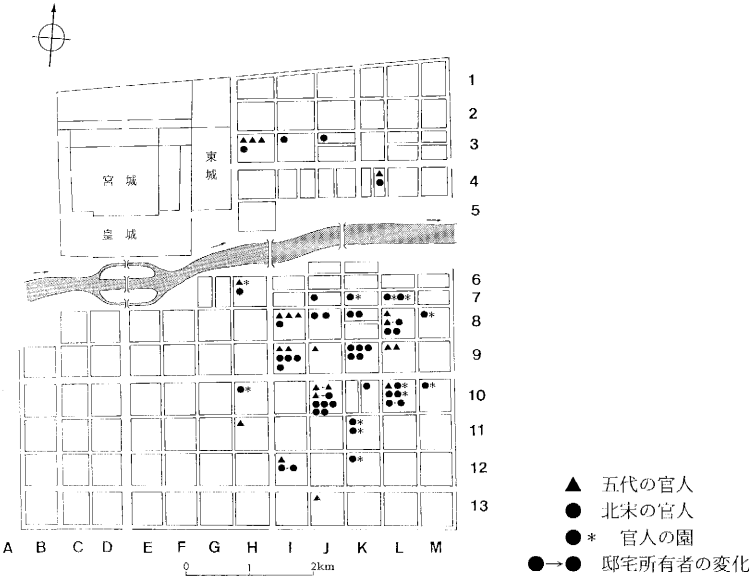


図10　第6期　唐（827～907：文宗～唐末）

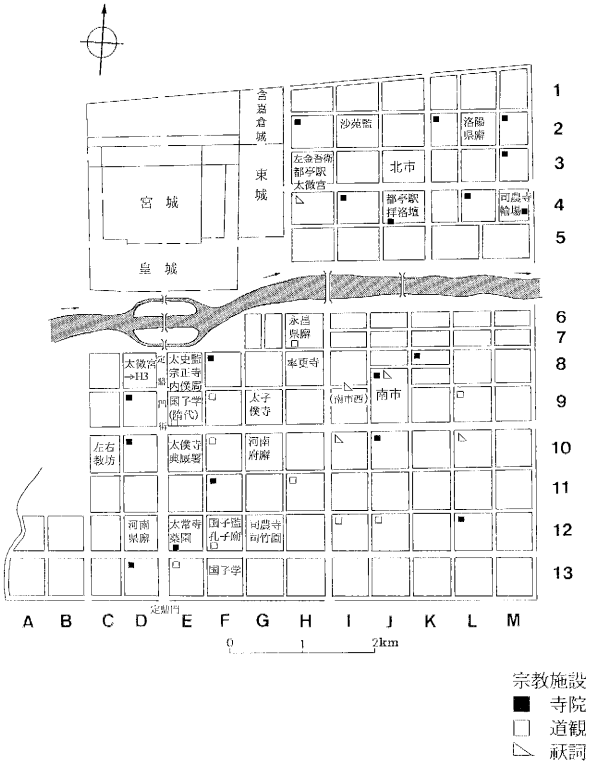


出典：清・徐松輯　高敏点校『河南志』（中華書局、1994年）

図11　第7期　五代・北宋（907～1127）

特に、皇城に近い天津橋南の尚善坊（E8）、積善坊（D8）、修文坊（E9）、観徳坊（D9）は、親王・公主、武氏一族、権臣が集居して、太史館・宗正寺・内僕局等の官設の重要建築が配置される城内の一等地であった（図12）。長寿年間（六九二～九四）には、観徳坊（D9）における内官以外の者の居住を不可とする詔勅もだされている。[66] この詔勅は、先述のように、神都の空間秩序を再編し、城内を南北に貫く軸線の聖性を明確にしようとする武則天の意志の一つの表れである。

武則天の神都期の居住傾向は、武則天死後に唐朝が再興し長安に政権中枢が戻った第四期にも継承され、城内に広く官人居住地が分布する（図8）。このことは、武則天後の中宗・玄宗の時代も、洛陽が政治的に重要な都市であり続けたことを示している。玄宗は、開元年間に五回も長安から洛陽に行幸し、武則天時に未整備であった皇城内の諸官庁を修築・整備し、天宝二年（七四三）には外郭城を修築している。[67] 発掘された含嘉倉の穀物も、



出典：徐松輯　高敏点校『河南志』（中華書局、1994年）
徐松著　張穆校補・方厳点校『唐両京城坊考』（中華書局、1985年）

図12　唐代洛陽城の行政機関と宗教施設

武則天・中宗・玄宗期に集中している。[68] 八世紀前半の洛陽は、大運河や黄河水系を通して山東や江南の穀倉地帯と直結し、一層重要性を高めていたのである。[69]

ところが、安史の乱後の第五期に至ると、一転して官人居住は激減し、そのまま唐末の第六期に至る（図9、図10）。このことは、『唐両京城坊考』巻五、擇善坊の徐松の按語に「按ずるに、洛陽の第宅は、多くが武后・中宗の東都居住時に建てられた。唐中葉以後は、公主の宅はなくなる」とある指摘を、裏付けるものである。

安史の乱後は、唐前期のように、長安の皇帝が洛陽に行幸すること

は絶えて無く、洛陽の皇城・宮城の重要性は著しく低下した。長安と洛陽で行なわれていた科挙も、代宗の大暦一一年（七七六）には停止されて[70]長安のみで行われるようになり、八世紀末には、洛陽の官人数や国家儀礼の規模は大幅に縮小された[71]。皇城南の定鼎門街を挟む諸坊に住む官人の数は減り、生活に便利な北市と南市の周辺の諸坊に官人居住地の空間は狭まっていった。特に、唐末には、南市東南の風光明美な諸坊を選んで、官人が集居する傾向が強まり、この居住傾向は、第七期の五代・北宋にかけて継続されてゆく（図11）。

唐中期以降に官僚街と庶民街の相違が著しくなる長安と相違し、洛陽の場合は、官僚街と庶民街という棲み分けは顕著ではない。その理由は、長安では太極宮から大明宮へ主宮殿が移転したのに対し、洛陽では、官人の居住地選定に直接影響を与える皇帝常居地が移動しなかったからである。高宗上元年間（六七四～七六）に、皇城西南に建築された上陽宮は、長安の大明宮に似た機能を有していたが、武則天の神都の政治の中心は、宮城の明堂であり続けた。

また、武則天の神都時期（六八四～七〇五）に周王朝の国都となった洛陽は、特に安史の乱（七五五～六三）の後、国都としての中心性を強める長安に対して、政治上の地位が低下し、居住官人数自体が激減したことも、身分・階層・出身地別の棲み分けが顕著でなかった理由の一つに挙げられる。唐後半期には、漕運システムの改革と全国的な商業圏の形成によって長安への安定的な穀物供給の道が開けるようになり、対外的には、吐蕃・ウイグルとの政治折衝の表舞台としての長安の政治的・軍事的重要性が高まっていた。

洛陽は、後漢以来の貴族の根拠地の山東に近いために、唐朝建国を機に、多数の山東貴族が家族・親族を率いて移住して来ていた。三、四世紀以来の戦乱の時代の中で、血縁と地縁を要とする自衛集団を作りながら地方に割拠していた後漢以来の貴族は、唐朝の両京での支配階層のコミュニケーションに加わり中央政界に進出する機会を求め、地

方居住を止めて、両京、とりわけ洛陽に移住してくるのである。[72] 実際に、現在判明する洛陽居住官人の多くは、山東貴族の出身である。[73]

洛陽城内に移住した山東貴族達は、南北の市の周囲に邸宅街を形成し、洛陽の郊外に別荘や荘園を建築して、洛陽北方の邙山に一族の共同墓地を造成した。ただ、唐後期に科挙制度が実質的に機能し始めると、洛陽よりも国都の長安での生活の方が、試験勉強のためにも、任官の機会を獲得するためにも一層重要になってくる。そのために、唐後期には、長安に居住地を購入する貴族の例が増すが、その場合でも、洛陽に本宅を残し洛陽との関係を持続させておく例が多い。

西域人の居住傾向を見てみると、北市と南市の周辺に多いが、とりわけ南市の周囲に集中する傾向が伺える。ゾロアスター教寺院の分布を見ると、祆祠（会節坊L10）や波斯胡寺（修善坊I10）、胡祆神廟（南市西坊）等が、南市の周囲に存在している。洛水北岸で胡祆祠は立徳坊（H4）一カ所だけである。このことは、南市と南市周辺の諸坊に多数の西域人が居住していたことを示している。実際に、新刊墓誌の中に西域出身のいわゆる昭武九姓の居住動向を見ると、南市周辺の諸坊に集中しており、ゾロアスター教寺院の分布と重なっている。[74]

武則天が皇帝となり周王朝を築いた時期に、洛陽城は繁栄の頂点を迎えた。武則天は、洛陽城を「神都」と称して事実上の国都に格上げし（六八四～七〇五）、唐に替わって周王朝（六九〇～七〇五）を建国した。武則天が試みた政権正統化は、洛陽を改造して神都にする諸事業の中に、最も端的に表現されている。[75] その意味で、武則天による洛陽改造の過程は、聖なる王都を創造しようとする武則天とその側近達の思索の道筋を示してくれると言えよう。そこで、簡単に、神都改称以来の武則天の政治過程を振り返るとこのようになる。[76]

従前の東都を神都と改称・中央官庁と官職の名称の改称（六八四年）→垂拱格頒布（六八五）→銅匭設置（六八六）→明堂と天堂の建築・洛水から瑞石（宝図）出現・南郊・洛水封神（六八八）→明堂での祭祀・革命歴（周暦）採用・則天文字制定（六八九）→殿試の開始・『大雲経』新編・周王朝成立・神都に武氏七廟設置・諸州に大雲寺設置（六九〇）→関中から洛陽への徙民による京兆府の縮小再編成[77]（六九一）→科挙の科目に『臣匭』を課す[78]（六九二）→外郭城と城門の修築（六九三）→天枢を端門に設置（六九四）→明堂と天堂の焼失・中岳嵩山封禅（六九五）→明堂再建し通天宮と称す（六九六）→九州鼎を鋳造し通天宮に設置（六九七）→漕渠開鑿（長安年間七〇一～七〇五）→長安行幸（七〇一）→武則天死去・唐朝再興・神都を東都に改称・郊廟・社稷・陵寝・百官・旗幟・服色・文字の制度を神都以前に戻す（七〇五）。

このように、武則天による洛陽の王都化は、(a)王都を象徴する建築物の造築（明堂・天堂・宗廟・外郭城・城門）や、(b)王権のシンボルの創作（新中央官制・垂拱格・殿試・周暦・九州鼎・天枢・則天文字・『宝図』『臣匭』『大雲経』）、(c)国家祭祀の挙行（洛水封神・嵩山封禅・南郊）、(d)洛陽を中国の中心に置く空間秩序の創出[79]（徙民・漕渠建築・関津設置・畿内制）によって成し遂げられた。

この中で、武則天の王都化政策の核心となったのは、『大雲経』の新編と天堂建築計画に代表される仏教の利用である[80]。その他の政策は、則天文字の創造を除き、王都化に際して一般に用いられる伝統的な政策そのままか、その変型であり、武則天に固有のものではない。つまり、武則天が、洛陽を王都に改造しようとした理由の一つには、仏教都市・北魏洛陽城の記憶や、龍門・白馬寺の存在に代表される、洛陽と仏教との強い結びつきが存在したからに違いない[81]。老子の末裔を自称する李氏の長安には無い、仏教との歴史的な繋がりを洛陽は有していた。弥勒下生という仏

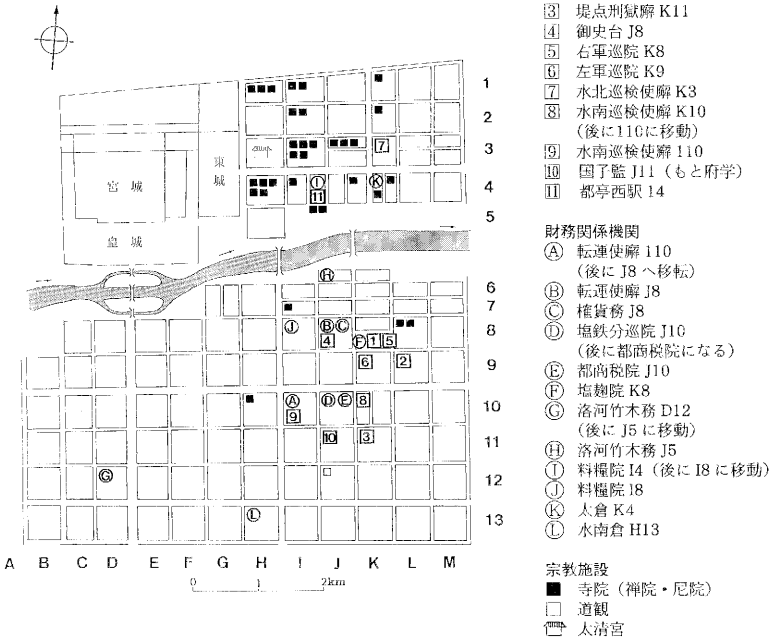
教の論理と、仏教に彩られた都市・洛陽そのものの存在が、武則天政権の正統化を演出したのである。

一般に、前近代社会における国都は、膨大な官僚・軍人と家族、一般住民、商人を抱える消費都市として、後背地の地域構造に大きな影響を与える存在であり、都の移動が領域に与える影響は小さくない。武則天が長安から洛陽＝神都に遷都したことは、関中から中原への主要経済地域の移動を意味し、華北平野の地域構造の変動を招来し、後の開封を核にした経済圏の形成を刺激することになったと思われる。[82]

武則天は、神都を中心とする交通体系を整えると同時に、[83]神都の人口充実のために、関中平野の人口の神都への強制移動も行っている。[84]その一方で、農村部からの多数の貧民が、職と食を求めて北市の北の進徳坊（I1）に流れ込み、既に七世紀前半には、「糠市」と俗称されるスラムが形成されていた。来学斎氏は、開元二八年（七四〇）の戸口統計に基づいて、河南・洛陽両県および洛陽城内の人口の総数を五〇万人程度と推測している。[85]

武則天時の洛陽外郭城の都市構造の改革で最も重要な事業は、長安年間（七〇一～七〇五）の漕渠の改修である。洛水に沿って洛水北岸の諸坊を東西に走り大運河と連結する漕渠は、隋代に開鑿されていたが、武則天時に改修・増築された。漕渠の改修にともない、漕渠に面した北市・景行坊（J4）・帰義坊（I4）・立徳坊（H4）の諸坊市は、武則天期から安史の乱で洛陽が破壊されるまで、城内随一の繁栄を誇る地域となった[86]（図3参照）。

武則天期の北市とその周辺諸坊には、多数の漢人・胡人の富商が居住し、業種ごとに商業組織の「行」を運営していたことが、龍門石窟に残る北市の綵帛行・絲行・香行が出資して造営した三つの仏窟の存在から判明している。[87]これらの三窟は、それぞれ、「北市綵帛行浄土堂洞」（光宅元年～景雲元年〈六八四～七一〇〉開鑿）、「北市絲行像龕」（垂拱四年〈六八八〉ないし永昌元年〈六八九〉開鑿）、「北市香行社像龕」（永昌元年〈六八九〉開鑿）と称され、神都時代の洛陽



出典：清・徐松輯　高敏点校『河南志』(中華書局、1994年)

図13　北宋の行政機関と宗教施設

北市の繁栄を窺う好資料となっている。

そのうち、最大の北市綵帛行浄土堂洞は、北市綵帛行に所属する七〇名の行人の名が刻まれ、窟内三壁基壇上に残された八つの円形の孔の痕跡から、造像は西方三聖（阿弥陀如来・観音菩薩・大勢至菩薩）と推定されている。[88] 当時の北市の商人達が浄土教を信奉していた事実を伝えており、武則天時の商人の宗教活動を窺うものとして貴重である。

安史の乱後の洛陽は、政治的な地位を低下させてゆくが、全国的な商業経済の勃興を受けて、唐後期にも全国的商業網の結節点の一つとなり、南市を中核とする諸坊は一定の繁栄を持続し、坊市制の弛緩も生じた。市場専用区画としての南市は宋代には存在せず、一般の居住区になっている（図

13)。唐末には、民間信仰の伝播にともない、泰山廟（八九四年に帰仁坊（M10）に建立）のような、民間信仰の廟の建築も南市周辺の坊に始まるようである。[89]

九世紀には、長安居住の多くの高官が、別荘としての優雅な邸宅を洛陽の南市周辺の水渠沿いの諸坊に購入するようになる。履道坊（L12）居住の白居易に典型的に見えるように、政争の激化する九世紀の中央高官にとって、洛陽城は、長安城の政争を逃れて一時的に退避する絶好の避難所であり、定年退職した高官が余生を楽しむ地ともなった。[90]中唐に始まるこのような洛陽居住の官人のライフスタイルは後代に模倣され、唐代官人の別荘・邸宅は、五代、北宋の官人達に購入され継承されてゆく。[91]

北宋では、洛陽城は東京の開封に対して西京となったため、種々の行財政機関が設置された。そのうち、都商税院（もと塩鉄分巡院）や、転運司廨・榷貨務・竹木務・塩鹺院等の重要財政機関は、唐代の南市の跡や、その周辺の諸坊に集中している（図13）。その点で、宋代の行財政機関の立地は、図12唐代洛陽城の行政機関の立地と対照的である。市場専用区画としての市の制度は、唐末に消滅し、五代・北宋の洛陽城の中心地は、唐代の南市を核とする地域となり、この地域に行財政機関が集中し、唐末・五代・北宋と継続して高官や富商が集住したのである。

おわりに

洛陽は、六〇五年に隋の大興城（唐長安）の東都として建築されて以後、北宋末に至るまで、武周や後唐の一時期を除き、基本的に長安と開封の陪都として機能し続けた。官人居住地の変遷を軸に都市構造の変化をみると、武則天

の神都期に洛陽は繁栄のピークを迎えて、その勢いは中宗・玄宗に継承されてゆくが、安史の乱を境に、洛陽の政治地位は低下し、唐前期のように長安と肩を並べることは二度となかった。

その原因には、対内的要因と対外的要因の両因が考えられる。対内的には、八世紀初の漕運システムの改革によって、穀倉地帯で財源の江南と長安が直結する輸送体制が生じ、それと同時に、貨幣経済・都市化の進展と都市網の拡大にともなう全国的商業圏が形成されだして、その中に長安も組み込まれていったことが挙げられる。公私の輸送手段により、安定的な食料供給が長安にもたらされるようになり、長安の皇帝が、食料を求めて洛陽まで出向く必要は無くなり、洛陽が、長安と山東・江南を媒介する必要性が薄れた。(92)

長安を核とする商業網の拡大を前提にして、科挙制度が、八世紀後半から九世紀初にかけて中国社会に浸透してゆく点も、価値の中心としての長安の地位を高めた。唐末の長安は、無数の科挙受験者の憧憬の国都となり、政治・経済・文化の集積した長安の引力は、上昇志向の強い全国の知識人の夢を掻き立てるようになる。(93)

一方、対外的には、唐後期の軍事・外交政策が、中国北東部の突厥や契丹よりも中国西部の吐蕃と西北部のウイグルを軸に展開するようになることが、国際政治と軍事防衛の拠点としての長安の比重を増す要因になった。(94) 吐蕃との軍事衝突は、長安西北部に広がる防衛戦線への軍粮補給の必要性を高めさせ、より効率的な新財務機関を長安に誕生させる契機となり、財政の中央化を促進させるのである。都市化の進む蜀の成都や江南の揚州・蘇州・杭州等の繁栄は、長安を凌ぐ面もあったが、長安のみが有する国内統治と国際関係の要としての位置は揺るがなかった。

唐後期の洛陽は、唐前期のような政治的・経済的重要性を失い、長安の退休官人が余生を過ごす場所、長安の政争を逃れる高官の一時的退避地となり、この性質は、北宋に継承され、政治の都の開封に対する文化の都になる。ただ、

洛陽の交通地理の利点は、華北平野と長江下流域の穀倉地帯を連結する役割を洛陽に賦与し、経済機能を突出させた。その意味で、隋唐洛陽城の経験は、五代・北宋になって大運河中継地点の開封に都が遷る前段階をなしたとも考えられる。

本稿は、隋唐洛陽史の専論がほとんど存在しない現状をふまえ、研究史を整理しながら、官人居住地の変遷を手掛かりに、隋唐洛陽城の都市構造の変遷を概観したものである。今後、時代とテーマを絞って、改めて詳細な検討を試み、本稿の不備を補ってゆきたい。幸い、現在は、新刊墓誌等の新史料と考古学調査の成果により、洛陽史研究はかつてない恵まれた研究環境にある。城内居住地と城外別荘・墓地・長安の別宅との関連や、都市構造の変化に伴う官人社会の変容、洛陽居住の官人同士のコミュニケーションの実態等を系統的に分析できる史料も豊富に存在する。この好機を生かし、本稿での見通しを検証・改訂しながら、隋唐洛陽城の社会の復元に取り組みたい。

1　程存潔「唐代東都洛陽城市研究概況」(『中国史研究動態』一九九三―一〇)一一～一五頁。

2　妹尾達彦「唐長安城の官人居住地」(『東洋史研究』五五―二、一九九六年)。

3　隋煬帝によって洛陽が建築されて以後、実質的に国都となった期間は、高宗・武則天の神都(六八四～七〇五)、五代の後梁(九〇九～一二)、後唐(九二三～三六年)、後晋(九三六～三八)の時期である。東都の期間は、隋大興城の東都(六〇五～一八)、唐長安城の東都・東京(六一八～八三、七〇六～九〇七)、五代開封の西京の期間が後晋(九三八～四六)、後漢(九四六～五〇)、後周(九五〇～五九)、北宋開封の西京(九六〇～一一二七年)である。このように洛陽が真の国都になった時期は短く、おおむね長安と開封の陪都として存在した。

4　本稿は、一九九三年八月に香港で開催された第34回国際東洋学者会議(ICANAS)での報告と、同年十一月の東洋史研究会

大会（京大会館）での報告を踏まえて成稿した "Luoyang: 605-1127, A History of Urban Social Structure of a Capital"（妹尾達彦『唐代長安、洛陽城の都市構造と都市社会史の研究』文部省科学研究費一般研究(c)一九九五年、第六章、二二六～二五四頁）を、その後に公刊された新史料と研究に基づいて増訂したものである。

5　河野通博「黄河中下流部」（木内信蔵編『東アジア』朝倉書店、一九八四年所収）二一三頁。

6　John L. Buck, *The Land Utilization in China*, Shanghai: The North-China Daily News, 1937.

7　Caroline Blunden and Mark Elvin eds., *Cultural Atlas of China*, Oxford: Phaidon, 1983, pp. 28-29. 林之光・張家誠『中国気候』（陝西人民出版社、一九八五年）二九九～三〇〇頁。ただし、歴史上、気候は変化しており、七〇〇〇年前から二五〇〇年前の気候は、現在よりも温暖で、洛陽周辺から象やダチョウの化石も出土している（洛陽市地方志編纂委員会編『洛陽市地理志』紅旗出版社、一九九二年、第八章気候、第一一章植物・動物資源）。

8　岡田英弘「東アジア大陸における民族」（橋本萬太郎編『民族の世界史5　漢民族と中国社会』山川出版社、一九八三年）五〇～五九頁。

9　洛陽市地方史志編纂委員会弁公室編『洛陽―絲綢之路的起点』（中州古籍出版社、一九九二年）、岡田英弘、前注8「東アジア大陸における民族」。厳耕望『唐代交通図考　第一巻京都関内区』（中央研究院歴史語言研究所専刊之八三、一九八五年）。なお、『洛陽―絲綢之路的起点』は、洛陽を結節点とする交通路の変遷を知るのに便利である。同書は、池田温先生よりお送りいただき、その内容を知ることができた。ここに御礼申し上げる次第です。

10　洛陽の軍事地理に関しては、史念海『中国歴史地理綱要（下冊）』（山西人民出版社、一九九二年）第七章歴史軍事地理、第四節対于都城的拱衛和防守の洛陽の既述を参照（同書四七〇～七四頁）。また、曽爾琴「洛陽従漢魏至隋唐的変遷」（『中国古都研究』第三輯、一九八七年）二一二～二三頁も参照。

11　華北東部の統治の要としての洛陽の機能は、蕭錦華『唐代前期的河南府』（香港中文大学研究院歴史学部哲学碩士論文、一九

九五年一二月）で詳論されている。本書は、香港中央大学の劉健明教授のご好意により蕭錦華氏から頂戴して読むことができた。ここに深謝申しあげる次第です。

12　前近代中国の国都の立地条件に関しては、史念海「我国古代都城建立的地理因素」（『中国古都研究』二、一九八六年）、同「中国古都的変遷與文化融通」（『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』一九九四年一二月）、侯甫堅「中国古都選址的基本原則」（『陝西師範大学歴史系学術論文集』陝西人民教育出版社、一九九四年）等を参照。

13　『隋書』巻三、煬帝上、仁寿四年一一月、『元和郡県図志』巻五、河南府等。

14　洛陽に建都した王朝の数については、九朝（東周・後漢・曹魏・西晋・北魏・隋（煬帝）・武周・後梁・後唐）が一般的だが、十朝（＋後晋）、十一朝（＋夏）、十二朝（＋殷）、十三朝（＋唐）、十五朝（＋前漢・西周）の諸説がある。詳しくは、韓忠厚「洛陽建都朝代考略」（『河洛春秋』一九九五年第一期）参照。

15　北宋の後にも、洛陽は、金の西京になったが、規模は六分の一に過ぎない。金中京の城郭が元・明・清・中華民国を経て現在の老城地区に継承される（図3唐洛陽城の都市プラン参照）。

16　史念海、「我国古代都城建立的地理因素」（『中国古都研究』二、一九八六年）、閻崇年「後記」（『中国古都研究』二、一九八六年）、妹尾達彦「古都は蘇る」（『東方』七五、一九八七年）。

17　内中国（Inner China）、外中国（Outer China）の概念は、前注7 Caroline Blunden and Mark Elvin eds., *Cultural Atlas of China*, pp.14-17 を参照。

18　中国の八地域に関しては、G. William Skinner, "Regional urbanization in nineteenth-century China", in G. William Skinner ed., *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977. pp.212-220. 及び、Robert M. Somers, "Time, space, and structure in the consolidation of the T'ang dynasty (A.D.617-700)", *Journal of Asian Studies*, XLV, No.5, 1986. を参照。

19 隋煬帝の洛陽建築の要因に関しては、高敏「関于隋煬帝遷都洛陽的原因」（『魏晋南北朝史論集』二、一九八三年）、伯岳「隋煬帝為何営建東都洛陽」（『西北大学学報（哲学社会科学版）』一九八七年第二期）参照。

20 武則天の洛陽国都化の要因について、郭紹林「唐高宗武則天長駐洛陽原因辨析」（『史学月刊』一九八五年第三期）、同「洛陽與隋唐政治」（『河洛春秋』一九八九年第四期）が、国内的には、山東と江南の穀倉地帯の掌握の利便、国際的には、突厥第二帝国と契丹に対抗する軍事拠点としての役割をあげているのは、妥当と思われる。

21 日本における北魏・隋唐洛陽城の都市プランの研究史に関しては、妹尾達彦「洛陽研究在日本」（『河洛史誌』一九九四年第四期）を参照。

22 松本保宣「東都洛陽宮明福門付近について」（『立命館文学』五一九、一九九〇年）。

23 中村裕一「隋の東都洛陽と『大業雑記』（『汲古』一七、一九九〇年）、同「『大業雑記』と『元河南志』―隋の東都史料―」（唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院、一九九二年）。

24 清木場東「隋東都の皇城―城、門、街―」（『久留米大学商学部40周年記念論文集』、一九九一年）。

25 楊寛『中国古代都城制度史研究』（上海古籍出版社、一九九三年）。

26 朴漢濟「北魏洛陽社会と胡漢体制―都城区画と住民分布を中心に―」（『お茶の水史学』三四、一九九〇年）。

27 Victor Cunrui Xion, "Sui Yandi and the Building of Sui-Tang Luoyang. "*Journal of Asian Studies*, 52, No. 1, 1993. なお、隋唐洛陽城の都市プランの系譜に関しては、妹尾達彦「都市の生活と文化」（『魏晋南北朝隋唐史の諸問題』汲古書院、一九九六年）を参照。

28 （佐藤武敏「唐代の洛陽と洛水」（『中国史研究』七、一九八三年）。

29 『唐六典』巻七工部員外郎、東都条、『旧唐書』巻三八、地理志、『唐両京城坊考』巻五、外郭城の注など。

30 郭紹林「洛陽天津橋與唐代社会生活」（『河洛春秋』一九九二年第三期）、同「洛陽中橋與唐代社会生活」（『河洛春秋』一九九

二年第一期)。

31 隋唐洛陽城の洪水については、佐藤武敏「唐代の洛陽と洛水」『中国史研究』七、一九八三年、洛陽市地方志編纂委員会編『洛陽市地理志』(紅旗出版社、一九九二年)所収「洛陽市歴代水旱災害統計表」、呉慶洲『中国古代城市防洪研究』(中国建築工業出版社、一九九五年)所収「唐洛陽城水災情況統計表」を参照。

32 宿白「隋唐城址類型初探(提綱)」(北京大学考古系編『紀念北京大学考古専業三十周年論文集 一九五二〜一九八二』文物出版社、一九九〇年)。

33 『唐両京城坊考』巻三、東京、宮城。ただし、一般に、易の後天図方位は、宋代になって成立したものと考えられており、隋洛陽城の宮殿配置に応用されたと考えるのは疑問である。

34 翟智高「古代都城選址中的風水観念」(中国古都学会第13届学術年会論文、一九九五年一〇月、偃師)。

35 『元和郡県図志』巻五、河南道。

36 閻文儒「隋唐東都城的建築及其形制」(『北京大学学報(人文科学)』一九五六年第四期)。

37 岡崎敬「隋・大興=唐・長安城と隋唐・東都洛陽城—近年の調査成果を中心として—」(『仏教芸術』五一、一九六三年)。

38 礪波護「中国の都城」(上田正昭編『都城』社会思想社、一九七六年)。

39 田中淡「隋朝建築家の設計と考証」(同著『中国建築史の研究』弘文堂、一九八九年、原載一九七八年)。

40 Nancy Shatzman Steinhardt, *Chinese Imperial City Planning*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1990.

41 李永強「隋唐東都洛陽城非対称布局浅析」(『河洛春秋』一九九六年第一期)は、工事開始後に計画を変更したという見解に基づき、従来の中国での研究史を簡潔に整理した好論文である。

42 **表1** 11閻文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘査記」一三二頁、蘇健・白献章「隋唐東都城軸線保護芻議」(『河洛春秋』一九九〇年第二期)。ただし、後者の論文では、現在、明堂址と公式に推定されている八角形の基址を、天堂址と推定しており、発掘当初は、

洛陽在住の研究者の間で意見が分かれていたことを窺わせる。

43　ただし、辛徳勇『隋唐両京叢考』（三秦出版社、一九九三年）所収「『武則天明堂』遺址質疑」では、考古学調査の報告によって比定された明堂址を、文献との照合から天堂址と比定し、明堂址と比定された建築の南方の建築址（考古学者は唐乾元殿址と推定）を明堂址に比定している。同書付載の図30「明堂、天堂位置推測図」参照。この見解に対して、考古学者の側からの正式の反論は公表されていないようだが、楊煥新「試談唐東都洛陽宮的几座主要殿址」（『漢唐與辺疆考古研究』一、一九九四年）は、詳細な検討の末、所載の図1「唐東都洛陽宮主要殿址復元示意図」に基づき、従来の明堂址比定の見解を再確認している。

44　楊煥新「略談隋唐東都宮城、皇城和東城的几箇問題」（『漢唐與辺疆考古研究』一、一九九四年）、同、前注43「試談唐東都洛陽宮的几座主要殿址」（同上書）。

45　天堂の位置に関しては、洛陽の考古学者の間でも、現在意見が分かれているようである。上記の楊煥新氏の論文では、明堂の真北の建築址を天堂と推定するのに対して、明堂址の西北、中軸線から西に約一〇〇mほどずれる円形建築遺址（下記表1番号9の論文では五〇mとする）を、天堂址と推定する見解もあり、最近の表1番号8の「略論隋唐東都城遺址的考古収穫與文物保護」によると、結論はまだ出ていないという。表1番号9「四十年来洛陽隋唐以降的考古発現與研究」では、慎重に明言を避けながらも、円形建築遺址を天堂址と示唆している。本稿では、中軸線上に比定する楊煥新氏の見解に従い、明堂真北の建築址を天堂址とするが、今後の考古学調査の成果を俟ちたい。なお、この円形遺址では、像造題記が見つかり、上面に「維大唐神龍元年歳次己巳四月庚戌朔八日己奉為皇帝皇后敬造釈迦牟尼仏一鋪用此功徳滋助皇帝皇后聖化無窮永窮供養」の五十二字が刻まれていたことから、この建築物が中宗復位以前の武則天期に既に存在しており、国家の安寧を祈願する重要な仏教関連の建築物であったことは確かである。

46　武則天時の明堂の機能に関しては、金子修一「則天武后の明堂について」（『律令制―中国・朝鮮の法と国家』汲古書院、一九

八六年）と A. Forte, *Mingtang and Buddhist Utopias in the History of the Astronomical Clock, The tower, states and armillary sphere constructed by Empress Wu*, Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Rome, 1988）、曽意丹「明堂與則天女皇的登基」（『洛陽考古四十年』科学出版社、一九九六年）等を参照。

47　武則天時代の郊廟親祭については、金子修一「唐太宗―睿宗の郊廟親祭について―唐代における皇帝の郊廟親祭、その(1)―」（『中国の都市と農村』汲古書院、一九九二年）参照。

48　当論著目録は、一九九〇年以前の中国大陸の近一〇年間の成果が中心であり、日本を始め、台湾、欧米の研究業績に関しては脱落が多く増補を要する。筆者が、一九八三年に、長安に関する文献目録を作成した際に、唐代長安に関する論著の総数は、一九八三年以前の業績に限っても、既に四〇〇以上に達していた（妹尾達彦『唐長安城関係論著目録』一九八三年、原載 *T'ang Studies*, 2, 1984, pp. 129-186. 同目録は、洛陽の論著と合わせて、『唐両京研究論著目録』と題し増訂中である）。研究者・研究機関の増加を背景に、特に近一〇年間の長安・洛陽に関する論著は飛躍的に増加しており、長安だけで六〇〇を越えるに至っている。しかし、長安に比べると、隋唐宋の洛陽に関する論著の総数は、なお二〇〇程度に過ぎない。論著の数が研究の水準をそのまま反映しているとは必ずしも言えないが、洛陽史研究の遅れは否めない。

49　高敏氏は、北京図書館に現存する徐松輯『永楽大典本河南志』を校勘し、同書の一部に元代の改易が存在するものの、基本的に、宋代の宋敏求『河南志』の原文をほぼ鈔録していることを論証し、隋から北宋にかけての洛陽史研究に際し、徐松の集輯した『永楽大典本河南志』が決定的に重要な史料であることを確認した。現行の藕香零拾叢書本『元河南志』四巻は、徐松の輯本『河南志』に基づいて、徐松没後の光緒三〇年（一九〇四）に刊行されたものであり、北京図書館現蔵の徐松本『永楽大典本河南志』とは異同がある（高敏、同上書参照）。また、高敏「藕香零拾叢書本『元河南志』書後」（謝国楨・張舜徽編『古籍論叢』（福建人民出版社、一九八二年）を参照。

50　新刊の墓誌集の目録は、妹尾達彦、前注2「唐長安城の官人居住地」所収の表1「近刊主要隋唐墓誌資料集一覧」参照。こ

の表作成以後に公刊された資料集として、陝西省古籍整理弁公室編・呉鋼主編『全唐文補遺』（三秦出版社、一九九四年～。現在第二輯まで入手）があげられる。第二輯までに収録の墓誌・墓碑の数は一五〇〇点程である。なお、この『全唐文補遺』は、刊行が予定されている霍松林主編『新編全唐五代文』とは別の書である。

51　高敏「『唐両京城坊考』東都部分質疑」（『中華文史論叢』一九八〇年第三期）、同「唐代東都坊数蠡測」（『中国古代史論叢』一九八二年第二輯）。

52　中島比「唐両京城坊攷収載人物拾遺稿」（『東洋史苑』二六・二七、一九八六年）。

53　陳久恒「唐東都洛陽城坊里之考証―從唐代墓誌看東都坊里名称及数目」（『中国考古学会第五次年会論文集』一九八五年）、同「唐東都洛陽坊里宅第補」（『中国考古学研究―夏鼎先生考古五十年紀念論文集』二集、科学出版社、一九八六年）。

54　張忱石「唐両京坊宅補遺」（『古籍整理與研究』第二期、一九八七年）。

55　李建超「増補唐両京城坊考」（『西北歴史研究』三秦出版社、一九八七年）、同「『千唐誌斎蔵誌』校補唐両京城坊」（『西北大学学報（哲学社会科学版）』一九八七年第四期）、同「増補『唐両京城坊考』（上・下）」（『河洛春秋』一九九一年第一期・第二期）。最近、同氏は、上記の研究を集成して、『増訂唐両京城坊考』（三秦出版社、一九九六年二月）を刊行した。同書は、徐松『唐両京城坊考』の増補作業として、現在最も完備された内容である。

56　趙超「唐代洛陽城坊補考」（『考古』一九八七年第九期）、同「也説唐代〝坊〟、〝里〟的不同性質」（『文史知識』一九九一年七期）。

57　辛徳勇「隋唐両京城坊考若干問題新考」（『古代文献研究集林』第一集、一九八九年）、同『隋唐両京叢考』（三秦出版社、一九九三年）一五六～六〇頁、同「隋唐両京城坊若干問題新考」（『古代文献研究集林』第一集、一九八九年）、同『隋唐両京叢考』（三秦出版社、一九九三年）。

58　劉漢忠「『唐両京坊宅補遺』再補（一）（二）」（『古籍整理與研究』六、中華書局、一九九一年）。

59 張劍「唐代東都里坊的几箇問題」(『河洛文化論叢』第二輯、一九九一年)。

60 閻文儒・閻萬鈞『両京城坊考補』(河南人民出版社、一九九二年)。

61 馮吾現主編・洛陽古代芸術館編『隋墓誌人物伝』(中州古籍出版社、一九九四年)。

62 程存潔「『唐両京城坊考』東都里坊補正」(『中国史研究』一九九四年第三期)、同「『唐両京城坊考』校補拾遺」(『魏晋南北朝隋唐史資料』一四、一九九六年)。

63 以上の他に、洛陽市第二文物工作隊編・李献奇・黄明蘭主編『画像傳石刻墓誌研究』(中州古籍出版社、一九九四年)もある。唐長安城に関する研究は、妹尾、前注2「唐長安城の官人居住地」を参照。

64 洛陽市文物工作隊編・葉万松主編『洛陽考古四十年』(科学出版社、一九九六年)、四八一頁。

65 吐魯番より、貞観二二年(六四八)の洛陽城内河南県の不動産売買の私契が発見され、唐初の洛陽における不動産購入の具体像が明らかになった。「唐貞観二十二年(公元六四八年)洛州河南県桓徳琮典舎契『吐魯番文書』四(文物出版社、一九八三年)二六九～七〇頁。池田温「吐魯番・敦煌文書にみえる地方城市の住居」(唐代史研究会編『中国都市の歴史的研究』一九八八年一八七～八八頁)、陳國燦(關尾史郎訳)「長安、洛陽よりトゥルファンに将来された唐代文書について」(『東洋學報』七二―三・四、一九九一年)参照。

66 『河南志』(中華書局本)観徳坊、二四頁

67 『河南志』(中華書局本)京城門坊街隅古蹟、京城、一頁、四頁。

68 含嘉倉に関しては、表1所掲の論文以外に、鄒逸麟「従含嘉倉的発掘談隋唐時期的漕運和粮倉」(『文物』一九七四年第二期)、宮園和禧「唐代前半期における倉の管理・運営―」(『九州共立大学紀要』八―二、九―一合併号、一九七四年)、布目潮渢「隋唐時代の穴倉と帝陵―洛陽から西安へ―」(『東洋学術研究』一八―一、一九七九年)、礪波護「隋唐時代の太倉と含嘉倉」(『東方学報京都』五二、一九八〇年)、張弓『唐朝倉廩制度初探』(中華書局、一九八六年)、清木場東『唐代財政研究(運輸篇)』

（九州大学出版会、一九九六年）等を参照。

69　外山軍治「唐代の漕運」（『史林』二二―二、一九三七年）、浜口重國「唐の玄宗朝に於ける江淮上供米と地税との関係」（同著『魏晋南北朝隋唐史の研究』東大出版会、一九六六年、原載一九三四年）、石雲涛「唐前期関中災荒・漕運與玄宗東幸」（武漢大学歴史系魏晋南北朝隋唐史研究室編『魏晋南北朝隋唐史資料』一三、一九九四年）。

70　洛陽の科挙の変遷に関しては、郭紹林「唐五代洛陽的科挙活動與河洛文化的地位」（『河洛文化論叢』二、一九九一年）を参照。

71　建中三年（七八二）に洛陽の郊社斎郎の定員一一〇人が全廃され、貞元五年（七八五）には、太廟斎郎の定員一二〇人が全廃されており（『唐會要』巻一七、緑廟裁制上、同巻六五、太常寺貞元八年四月条）、国家祭祀における洛陽の地位の低下を如実に物語る。

72　陳寅恪「論李栖筠自趙徒衛事」（同『金明館叢稿二編』上海古籍出版社、一九八〇年）、Patricia B. Ebrey, *The Aristocratic Families of Early Imperial China, A case study of the Po-ling Ts'ui family*, Cambridge University Press, 1978, David Johnson, "The last years of a great clan: The Li family of Chao Chun in late T'ang and early Sung." *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 27-1, 1977. 毛漢光「從士族籍貫遷移看唐代士族之中央化」（同著『中国中古社会史論』聯經出版事業公司、一九八八年、原書一九八一年）、愛宕元「唐代滎陽鄭氏研究―本貫地帰葬を中心に―」（『人文』三五、一九八九年）、中砂明徳「唐代の墓誌と墓葬」（礪波護編『中世の文物』京都大学人文科学研究所、一九九三年）等を参照。

73　中島比、前注52「唐両京城坊攷収載人物拾遺稿」、李建超前注55『増補唐両京城坊考』参照。

74　李健超「漢唐時期長安・洛陽的西域人」（『西北歴史研究』一九八八年号、三秦出版社）、劉銘恕「洛陽出土的西域人墓誌」（前注9『洛陽絲綢之路的起点』一九九二年）、盧兆蔭「唐代洛陽與西域昭武諸国」（『河洛春秋』一九九三年第三期、後『洛陽考古四十年』科学出版社、一九九六年に所収）、林梅村「洛陽出土唐代波斯僑民阿羅憾墓誌跋」（『学術集林』上海遠東出版社、

一九九五年)、李健超「従洛陽出土和伝世的一些文物来看中外文化交流」(同上『洛陽考古四十年』)等を参照。

75　武則天の支配の正統性の問題に関しては、P. W. L. Guisso, *Wu Tse-t'en and the Politics of Legitimation in T'ang China*, Western Washington, 1978. 大室幹雄『檻獄都市』(三省堂、一九九四年)を参照。武則天研究会・洛陽市文物園林局編『武則天與洛陽』(三秦出版社、一九八八年)には、洛陽と武則天に関する一三篇の論文を収録し、武則天の支配をめぐる諸問題を論じている。また、近刊の氣賀澤保規『則天武后』(白帝社、一九九五年)は、武則天の権力掌握過程を簡潔に描きだしている。

76　『資治通鑑』巻二〇二～二〇七、『旧唐書』巻六、則天武后、『新唐書』巻四、則天皇后等を参照してまとめる。

77　山根清志「武則天の『神都』充実策をめぐる一、二の問題」(五井直弘編『中国の古代都市』(汲古書院、一九九五年)。

78　『臣匭』のもつ政治的意味については、渡部信一郎「『臣匭』小論―唐代前半期の国家と国家イデオロギー」(礪波護編『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所、一九九二年)を参照。

79　礪波護「神都洛陽の四面関」(平成元年度科学研究費補助金　一般研究(A)　研究成果報告書『アジアにおける都市の形態と構造に関する歴史地理学的研究』、一九九〇年)、同「唐代の畿内と京城四面関」(唐代史研究会編『中国の都市と農村』(汲古書院、一九九二年)は、洛陽が神都になった際の関と畿内制度の設置の問題を論じている。

80　武則天と仏教との結びつきは、陳寅恪「武曌與仏教」(『金明館叢稿二編』上海古籍出版社、一九八〇年、)、Antonino Forte, *Pitical Propaganda and Ideorogy in China at the End of the Seventh Century*, Napoli: Instituto Universitario Orientale, 1976. 礪波護『唐代政治社会史研究』(同朋舎、一九八六年)第四部仏教と国家、第一章唐中期の仏教と国家、を参照。

81　武則天が政権を掌握する七世紀の洛陽において、仏教が階層・身分・種族・出身地を問わず広く信奉されていたことは、龍門の窟龕を造営した功徳主が、洛陽在住の皇室・百官・僧尼・商業組合(行)・坊の住民・外国人・一般庶民等に幅広くおよ

んでいることから明確である。特に、賓陽南洞の窟龕には、洛陽南市西南の思順坊（一九）居住の老若一二四名（すべて無官の庶民）の発願を示す「唐洛州河南県思順坊老若等造像弥勒像記」（貞観二二年〈六四八〉刻）が刻まれており、洛陽城内の坊の住民が集って、龍門に仏龕を開鑿していた様子が分かる（水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』同朋舎、一九八〇年、原書一九四一年、三二二～二三頁）。このような、洛陽城内における仏教信仰の浸透が、武則天が仏教論理にもとづき洛陽において政権を掌握する前提となっていたのである。

82　国都の立地が後背地の地域経済と密接な関連にあることは、主に宋代開封の事例をもとに論じた、Robert M. Hartwell, "A Cycle of Economic Change in Imperial China: coal and iron in Northeast China, 750-1350." *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 10, 1967, および、William Skinner, "Presidential Address: The Structure of Chinese History", *Journal of Asian Studies*, vol. 44-2, 1985. を参照。また、近年、久保田和男氏は、国都駐在の軍人の粮食補給問題が、国都の立地や都市構造に与える大きな影響を論じ、軍糧補給に有利な点を開封奠都の要因としている（同「五代国都新考」（『史觀』一一九、一九八八年）、同「宋都開封と禁軍軍営の変遷」（『東洋学報』七四―三・四、一九九三年）。

83　王文楚「唐代洛陽至襄州駅路」（洛陽市地方志編纂委員会弁公室編『洛陽―絲綢之路的起点』中州古籍出版社、一九九一年）。

84　山根清志、前注75「武則天の『神都』充実策をめぐる一、二の問題」。

85　来学斎「洛陽歴代人口発展考索」（『河洛春秋』一九九一年第二期）二七頁。ただし、この数字に関しては、今後、より厳密な検討が必要である。

86　『元河南志』巻四、漕渠には、「皆天下之舟船所集。常萬餘艘、填満河路。商旅貿易、車馬填塞、若西京的崇仁坊」とある。長安城の崇仁坊（H4）は、東市の西北方に位置して、旅館や食堂の軒を連ねる長安城で最も繁華な坊として著名であり（『長安志』巻三、崇仁坊）、景行坊の繁栄ぶりを窺うことができる。

87　陳有忠「隋唐時期的洛陽商業」（『鄭州大学学報』一九八二年第二期）、賈廣興「龍門石窟群中的商業窟」（『中原文物』一九八

九年第二期)、曾布川寛「龍門石窟における唐代造像の研究」(『東方学報　京都』六〇、一九八八年)三一三〜二六頁。

88　温玉成「龍門唐代窟龕の編年」(『中国石窟　龍門石窟二』平凡社、一九八八年)、顧彦芳・李文生「龍門石窟唐代主要石窟総叙」(同上書)。

89　『元河南志』巻五、帰仁坊。泰山信仰の伝播に関しては、酒井忠夫「太山信仰の研究」(『史潮』七―二、一九三七年)を参照。

90　王吉林「晩唐洛陽的分司生涯」(『晩唐的社会與文化』台湾学生書局、一九九〇年)、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」(『白居易研究講座　第一巻　白居易の文学と人生』勉誠社、一九九三年)、程存潔「唐代東都留守考」(武漢大学歴史系魏晋南北朝隋唐史研究室編『魏晋南北朝隋唐史資料』一三、一九九四年)。

91　木田知生「北宋時代の洛陽と士人達―開封との對立のなかで―」(『東洋史研究』三八―一、一九七九年)、王鐸「唐宋洛陽私家園林的風格」(『中国古都研究』三、一九八七年)、同「白居易洛陽履道坊故里園考弁」(『河洛春秋』一九九二年第三期)王岩「白居易的造園活動及其園林思想」(『河洛春秋』一九九〇年第四期)。

92　貞元一九年(八〇三)の旱害によって、国都への穀物輸送量が減少して国都の食料不足が予想され、多人数の上京することになる貢挙と銓選の停止の詔勅が出された時、韓愈は、長安の商人の家には食料の備蓄があることを根拠の一つとして詔勅に反対している(韓愈「論今年権停挙選状」(『昌黎先生集』巻三七)。長安には公私の輸送手段によって穀物が運ばれ流通するようになっていたのである。この点に関しては、妹尾達彦「唐長安人口論」(『堀敏一先生古稀記念　中国古代の国家と民衆』汲古書院、一九九五年)、同「唐代長安の盛り場(上)」(『史流』二七、一九八六年)一六〜二一頁を参照。

93　妹尾達彦、前注90「白居易と長安・洛陽」参照。

94　唐朝の外交政策の展開と内政との相関に関しては、陳寅恪『唐代政治史述論稿』(重慶、一九四四年)下篇「外族盛衰之連環性及外患與内政之関係」での大局的な分析を参照。

〔付〕本稿は、平成七、八年度三菱財団人文科学助成研究題目「中国唐代長安・洛陽城の都市文化」の成果の一部である。